

士は民法の学に於て造詣殊に深く謹厚篤実を以て称せらる因に記者は想起すことあり数年前同人相図り本誌に時論観の一欄を設け法政経済に関する大家の論説に付梗概を紹介することとせしか開始後一年を経たる頃記者は遇々博士を千駄木町に訪問したることあり談約一時間に及び私法研究の方法に付き懇懇示教せられ英国法の研究をも励められたるか当時吾時論観の学界に裨益することの莫大にして自分は常に之を熟読する事を怠らず此一欄は法学新報の特色として其事業を永続せられ度旨を述べられたり博士は享年尚ほ四十一に過ぎず今や前途多望の身を以て溘逝せらる洵に学界の爲め痛悼に耐へざるなり悲哉

378 法学博士川名兼四郎氏逝去

〔『法学新報』第24卷11(281)号 大正3年12月1日〕

○法学博士川名兼四郎氏逝く 東京帝国大学法科大学教授中央大学講師川名博士は数年来病褥に在り専ら其療養に努められつつありしか薬石効なく去月七日午後七時終に永眠せられ葬儀は同十日午後二時本郷駒込蓬萊町蓮光寺に於て執行せられたり博